

所 属	文化振興課
所属長	荏田 昭憲
電 話	06-6489-6385

A-LAB Exhibition Vol.41「たましいのかたち Soul Form」を開催します。

1 趣旨

尼崎市では、アートスペース「A-LAB」(えーらぼ)において、人間の死生観に興味を抱き、小説や古代史に着想を得て幻想的な作品を生み出してきた気鋭の画家、黒宮菜菜の新作個展「たましいのかたち Soul Form」を開催します。

黒宮は近年、古墳時代の遺跡から出土した「少年」と「鳥」をモチーフに取り上げ、浮遊する魂のイメージを描いてきました。今回の個展では、そこからさらに展開し、空間を往来する鳥、馬、船、さらに見えない存在を可視化する衣服の袖や領巾(ひれ)の揺れなど、古代から様々な形象に託されてきた、魂のイメージを模索します。絵具や蜜蝋、植物や石など様々なものから成る独創的な画面から、どのような「たましいのかたち」が生成されるのか、注目の最新作をぜひご覧ください。

2 概要

会 期：12月9日(土)～1月28日(日)

会 場：A-LAB(尼崎市西長洲町2-33-1)

入場料：無料

時 間：(平日) 午前11時～午後7時

(土・日・祝) 午前10時～午後6時

※休館日：火曜日

年末年始 12月29日(金)～1月3日(水)

出展者：黒宮菜菜

問合せ：尼崎市文化振興課

電話 06-6489-6385 FAX 06-6489-6702

主 催：尼崎市

3 関連イベント

<アーティストトーク>

作品の背景や作品への思いをアーティストに聞きながら鑑賞(A-LABにて開催)

日 時：1月21日(日) 午後2時～3時

定 員：先着20人

申 込：メール (amalove.a.lab@gmail.com) にイベント名、氏名、年齢、電話番号を明記し送信

以 上

出展作家

黒宮菜菜



1980年 東京都生まれ

2009年 京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻
(油画) 修了

2015年 同大学博士号 (芸術学) 取得

小説、神話、古代史などから着想を得て、人間の死生観や自然観を独自の視点で描く。主に油彩作品と、染料と和紙による作品の、2種類の絵画作品を制作。特に近年の油彩作品では、支持体の縁に土手状のフレームを作り、キャンバスを器に見立て、絵具や蜜蝋、植物や石など様々なものを注ぎ込んで重層的で混沌とした画面作りを行っている。

作家コメント

魂に色や形を与えたとしたら、どのようなイメージになるだろうか。

古代の日本人は、魂の色を青色と考えていたらしい。そして、肉体が死を迎えると、魂は鳥や馬や船になる。陸海空、遠くまで移動可能なものたちだ。また、行ったきりではなく、再び帰ってくる性質のものたちでもある。行ったり来たり、どこを?と聞かれたら困るが、この辺りをうろうろとしているものたちなのである。

他にも、眼に見ることのできない魂は、衣服の袖や領巾(ひれ)の揺れによって視覚化されてきた。風が魂を運ぶというのだ。人が袖を振るとき、風を受けて領巾(ひれ)が棚引くとき、布の動きを介して魂が目の前に現れるのだ。

わたしが魂というキーワードに興味を持ち始めたのは、古墳時代の遺跡に渡り鳥(アジサシ)を抱いた少年の遺骨が埋葬されていたというテキストを読んでからだ。両親か親族が幼くして亡くなった子供の命に想いを馳せ、渡り鳥(毎年舞い戻ってくる)に魂を託して抱かせたのではなかろうかという内容であった。鳥に魂が乗りうつる。このような考えが日本にあったことにとっても驚いた。

魂が何かしら具体的な形をとって未来永劫存続するというイメージの生成。有限の命を自明のものとしながら生きる人間にとって、この生成活動は重要な営みに当たるのだろう。分からない、見えない、では安心できないのだ。だから想像によって魂の形を補った。これは、死を克服しようと試みた歴史ともいえるのではないだろうか。

これまでも人間の性や死生観に興味を抱いて創作活動を続けてきたが、ここでは、古代日本の魂の形象にヒントを得て作品を作ってみたいと思っている。神話や考古学の資料などを横断しながらイメージを紡ぎ、眼に見ることのできない魂の形を模索していきたい。



会期	2023年12月9日(土)～2024年1月28日(日)
開館時間	(平日) 午前11時～午後7時 (土・日・祝日) 午前10時～午後6時
会場	A-LAB (えーらぼ) 尼崎市西長洲町 2-33-1
休館日	火曜日、年末年始(12月29日(金)～1月3日(水))
入場料	無料
主催	尼崎市

開催要旨

人間の死生観に興味を抱き、小説や古代史に着想を得て幻想的な作品を生み出してきた気鋭の画家、黒宮菜菜の新作個展「たましいのかたち Soul Form」を開催します。

黒宮は近年、古墳時代の遺跡から出土した「少年」と「鳥」をモチーフに取り上げ、浮遊する魂のイメージを描いてきました。今回の個展では、そこからさらに展開し、空間を往来する鳥、馬、船、さらに見えない存在を可視化する衣服の袖や領巾（ひれ）の揺れなど、古代から様々な形象に託されてきた、魂のイメージを模索します。絵具や蜜蝋、植物や石など様々なものから成る独創的な画面から、どのような「たましいのかたち」が生成されるのか。注目の最新作をぜひご覧ください。

【展覧会に向けてのアーティストコメント】

魂に色や形を与えたとしたら、どのようなイメージになるだろうか。

古代の日本人は、魂の色を青色と考えていたらしい。そして、肉体が死を迎えると、魂は鳥や馬や船になる。陸海空、遠くまで移動可能なものたちだ。また、行ったきりではなく、再び帰ってくる性質のものたちでもある。行ったり来たり、どこを？と聞かれたら困るが、この辺りをうろろろとしているものたちなのであろう。

他にも、眼に見ることのできない魂は、衣服の袖や領巾（ひれ）の揺れによって視覚化されてきた。風が魂を運ぶというのだ。人が袖を振るとき、風を受けて領巾が棚引くとき、布の動きを介して魂が目の前に現れるのだ。

わたしが魂というキーワードに興味を持ち始めたのは、古墳時代の遺跡に渡り鳥（アジサシ）を抱いた少年の遺骨が埋葬されていたというテキストを読んでからだ。両親か親族が幼くして亡くなった子どもの命に想いを馳せ、渡り鳥（毎年舞い戻ってくる）に魂を託して抱かせたのではなかろうかという内容であった。鳥に魂が乗りうつる。このような考えが日本にあったことにとても驚いた。

魂が何かしら具体的な形をとって未来永劫存続するというイメージの生成。有限の命を自明のものとしながら生きる人間にとって、この生成活動は重要な営みに当たるのだろう。分からない、見えない、では安心できないのだ。だから想像によって魂の形を補った。これは、死を克服しようと試みた歴史ともいえるものではないだろうか。

これまで人間の性や死生観に興味を抱いて創作活動を続けてきたが、ここでは、古代日本の魂の形象にヒントを得て作品を作りたいと思っている。神話や考古学の資料などを横断しながらイメージを紡ぎ、眼に見ることのできない魂の形を模索していきたい。

— 黒宮菜菜

関連イベント

アーティストトーク

2024年1月21日(日) 午後2時～午後3時

作品の背景や作品への思いをアーティストに聞きながら鑑賞。

定員先着20人。メール (amalove.a.lab@gmail.com) で申込必要。

【イベントに参加申込する場合】

※関連イベントは参加無料です。

申込みはメールでA-LABへ。イベント名・氏名・年齢・電話番号を明記の上、下記メールアドレスまでお送りください。

A-LAB メールアドレス
amalove.a.lab@gmail.com

詳細はA-LABホームページ (<http://www.ama-a-lab.com>) をご覧ください。

広報用画像

・このプレスリリースに掲載されている画像データ(※6～7ページ参照)をプレス掲載用にご用意しております。

・下記の使用条件をご了承の上、A-LABまでお申し込みください。

使用条件：

- ・広報画像の掲載には各画像のキャプション、クレジットをご表示ください。
- ・トリミングや画像加工などはご遠慮ください。
- ・アーカイブのため、後日掲載紙、URLなどをお送りください。

以上、ご協力の程、何卒よろしくお願いいたします。

問い合わせ先

A-LAB(火曜日休館) 担当：八木、松井

電話/FAX 06-7163-7108 メール amalove.a.lab@gmail.com

尼崎市文化振興課(平日 午前8時45分～午後5時30分)

担当：山城、藤平

電話 06-6489-6385 / FAX 06-6489-6702

作家略歴

■黒宮 菜菜（くろみや なな）



1980年 東京都生まれ。

2007年 京都造形芸術大学芸術学部美術工芸学科洋画コース総合造形専攻卒業。

2009年 京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻油画修了。

2012年 京都市立芸術大学大学院美術研究科博士（後期）課程美術専攻（絵画）単位取得満期退学。

2015年 京都市立芸術大学・博士（芸術学）学位取得。

【制作ステートメント】

小説、神話、古代史などから着想を得て、人間の死生観や自然観を独自の視点で描く。主に油彩作品と、染料と和紙による作品の、2種類の絵画作品を制作。特に近年の油彩作品では、支持体の縁に土手状のフレームを作り、キャンバスを器に見立て、絵具や蜜蝋、植物や石など様々なものを注ぎ込んで重層的で混沌とした画面作りを行っている。

【受賞歴】

2009 京都市立芸術大学修了制作展 大学院市長賞

2014 トーキョーワンダーウォール公募 2014 トーキョーワンダーウォール賞

2017 京都市芸術新人賞

2019 VOCA 展 2020 現代美術の展望 - 新しい平面の作家たち - 佳作賞

【主な個展】

2022 「鳥を抱いて船に乗る」、ギャラリーノマル、大阪

2021 「ウツシキ アヲヒトクサ 黒宮菜菜展」、京都場、京都

2020 「画廊からの発言 新世代への視点 2020 黒宮菜菜展」、コバヤシ画廊、東京

2020 「カタストロフの器」、ギャラリーノマル、大阪

2019 「ARKO2019 黒宮菜菜」、大原美術館 本館、岡山

2019 「Boys」、FINCH ARTS、京都

2018 「うつつ」、ギャラリーノマル、大阪

2016 「夜——朧げな際」京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA、京都

2015 「トーキョーワンダーウォール都庁 2014」東京都庁第一本庁舎 3階南側空中歩廊、東京

作家略歴

【主なグループ展】

- 2023 「MUG +」、ギャラリーノマル、大阪
2022 「Since 1989 NOMART -アーティスト × 工房展-」、銀座 蔦谷書店 GINZA ATRIUM、東京
2021 「「じねんのいのち」 by FINCH ARTS」、CADAN 有楽町、東京
2021 「Aliens 2」、FINCH ARTS、東京
2021 「HOI-POI: Japanese Contemporary Painters」、SPACE Four One Three、ソウル、韓国
2020 「VOCA 展 2020 現代美術の展望-新しい平面の作家たち-」、上野の森美術館、東京
2019 「ここが浄土か。」、FINCH ARTS、京都
2019 「ポートレート モード」、2kw gallery、滋賀
2019 「30th - Miracle vol.5: Miracle」、ギャラリーノマル、大阪
2018 「AllStars」、ギャラリーノマル、大阪
2018 「京都府新鋭選抜展 2018」、京都文化博物館、京都
2018 「第 21 回 岡本太郎現代芸術賞展」、川崎市岡本太郎美術館、神奈川
2018 「small painting, painting small」、FINCH ARTS、京都
2017 「のっぴきならない遊動: 黒宮菜菜 / 仁藤建人 / 若木くるみ」、京都芸術センター、京都
2016 「3 人の絵」、同時代ギャラリー、京都

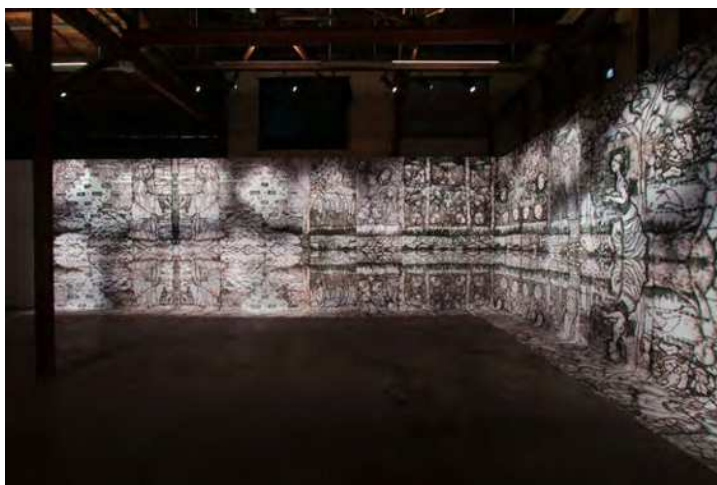
【コレクション】

大原美術館、岡山

参考図版



1



2

参考図版



3



3

参考図版

1. 黒宮菜菜 | 『緑の穴 #1』 | 2022
2. 黒宮菜菜 | 『ウツシキ アヲヒトクサ』 展示風景, 京都場 | 2021
3. 黒宮菜菜 | 『鳥を抱く #4』 | 2023

次回展

羽部ちひろ × 赤松加奈 展 (タイトル未定)

2024年2月17日(土) ~ 3月31日(日)

身近な風景や日常生活に根ざした少し不思議な絵画表現を手がける、羽部ちひろと赤松加奈によるコラボレーション展 (タイトル未定) を開催します。

■羽部 ちひろ (はぶ ちひろ)

1982年 札幌市出身、兵庫県在住

2003年 第3回武井武雄記念日本童画大賞

2005年 成安造形大学洋画クラス卒業

2007年 京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻油画修了

2010年 京都市立芸術大学大学院博士課程 (後期) 満期退学

【近年の主な個展】

2022年 「しらないはなし」、KOBE STUDIO Y3、兵庫

2021年 「近くから遠くへ」、GALLERY 301、兵庫

■赤松 加奈 (あかまつ かな)

1990年生まれ、奈良県在住

2013年 京都造形芸術大学美術工芸学科油画コース卒業

2015年 京都造形芸術大学大学院芸術表現専攻修了

2019年 群馬青年ビエンナーレ 2019 大賞

【近年の主な個展】

2021年 「赤松加奈 展 みんなの部屋」、喜多美術館、奈良

2021年 「赤松加奈 展 ここで描く」、galerie16、京都

かたき の しい 花 菜



黒宮菜菜

2023年12月9日〔土〕 - 2024年1月28日〔日〕

2023年12月9日 [土] — 2024年1月28日 [日]

人間の死生観に興味を抱き、小説や古代史に着想を得て幻想的な作品を生み出してきた気鋭の画家、黒宮菜菜の新作個展を開催します。

- 魂に色や形を与えるとしたら、どのようなイメージになるだろうか -

黒宮は近年、古墳時代の遺跡から出土した「少年」と「鳥」をモチーフに取り上げ、浮遊する魂のイメージを描いてきました。今回の個展では、そこからさらに展開し、空間を往来する鳥、馬、船、さらには見えない存在を可視化する衣服の袖や領巾(ひれ)の揺れなど、古代から様々な形象に託されてきた、魂のイメージを模索します。絵具や蜜蝋、植物や石など様々なものから成る独創的な画面から、どのような「たましいのかたち」が生成されるのか。注目の最新作をぜひご覧ください。



鳥を抱く#4 (2023年)

アーティストトーク

1月21日(日) 午後2時 - 午後3時

作品の背景や作品への思いをアーティストに聞きながら鑑賞。定員先着20人。

メール (amalove.a.lab@gmail.com) で申込必要。

(イベント名、氏名、年齢、電話番号を明記)

黒宮菜菜

1980年 東京都生まれ

2009年 京都市立芸術大学大学院美術研究科
修士課程絵画専攻(油画)修了

2015年 同大学博士号(芸術学)取得

小説、神話、古代史などから着想を得て、人間の死生観や自然観を独自の視点で描く。主に油彩作品と、染料と和紙による作品の、2種類の絵画作品を制作。特に近年の油彩作品では、支持体の縁に土手状のフレームを作り、キャンバスを器に見立て、絵具や蜜蝋、植物や石など様々なものを注ぎ込んで重層的で混沌とした画面作りを行っている。



住所:
尼崎市西長洲町2-33-1
会場に一般用駐車場はありません

問い合わせ先:
A-LAB Tel./Fax. 06-7163-7108
市役所 文化振興課
Tel.06-6489-6385

Instagram: @alab_amalove
Facebook: @amalove.a.lab
www.ama-a-lab.com



開館時間:
平日 午前11時 - 午後7時
土日祝 午前10時 - 午後6時

休館日:
火曜日
年末年始 (12月29日(金) - 1月3日(水))

入場料: 無料



魂のかたち Soul Form

A-LAB
Exhibition Vol.41

魂に色や形を与えるとしたら、どのようなイメージになるだろうか。

古代の日本人は、魂の色を青色と考えていたらしい。そして、肉体が死を迎えると、魂は鳥や馬や船になる。陸海空、遠くまで移動可能なものたちだ。また、行ったきりではなく、再び帰ってくる性質のものたちでもある。行ったり来たり、どこを?と聞かれたら困るが、この辺りをうろろろとしているものたちなのであろう。

他にも、眼に見ることのできない魂は、衣服の袖や領巾(ひれ)の揺れによって視覚化されてきた。風が魂を運ぶというのだ。人が袖を振るとき、風を受けて領巾が揺れ動き、布の動きを介して魂が目の前に現れるのだ。

わたしが魂というキーワードに興味を持ち始めたのは、古墳時代の遺跡に渡り鳥(アジサシ)を抱いた少年の遺骨が埋葬されていたというテキストを読んでからだ。両親が親族が幼くして亡くなった子どもの命に想いを馳せ、渡り鳥(毎年舞い戻ってくる)に魂を託して抱かせたのではなかろうかという内容であった。鳥に魂が乗りうつる。このような考えが日本にあったことにとっても驚いた。

魂が何かしら具体的な形をとって未来永劫存続するというイメージの生成。有限の命を自明のものとしながら生きる人間にとって、この生成活動は重要な営みに当たるのだろう。分からない、見えない、では安心できないのだ。だから想像によって魂の形を補った。これは、死を克服しようと試みた歴史ともいえるものではないだろうか。

これまでも人間の性や死生観に興味を抱いて創作活動を続けてきたが、ここでは、古代日本の魂の形象にヒントを得て作品を作りたいと思っている。神話や考古学の資料などを横断しながらイメージを紡ぎ、眼に見ることのできない魂の形を模索していきたい。

—黒宮菜菜

